

会 議 概 要

日時：令和8年5月18日（月）午後2時～4時

場所：新潟県庁行政庁舎16階 労働委第1控室

Zoom（Web会議システム）によるオンライン開催

出席委員 大橋委員 長下部委員 小林委員 佐藤委員
 (50音順) 須田委員 高橋委員 瀧口委員 土田純子委員
 土田陽子委員 樋口委員 星野委員 前田委員
 柳委員
 *欠席委員 出頭委員

関係課 義務教育課 濁川副参事
 子ども家庭課 栗林副参事

事務局 生涯学習推進課 庭野課長 青木課長補佐
 青少年家庭教育係 山本副参事 宇佐美副参事 加藤主任
 成人教育係 五十嵐副参事
 生涯学習推進センター 渡辺次長 佐藤副参事 桐生社会教育主事

発 言 者	内 容
佐藤会長	議事に入る。議題1の令和7年度「社会全体で子どもをはぐくむ運動」関連事業報告及び令和8年度関連事業の方向性について、事務局から説明願う。
事務局	(「令和7年度の取組状況と令和8年度の計画」について説明)
佐藤会長	今ほどの説明について質問、意見等があればいただきたい。
樋口委員	2点お願いしたい。 1点目は、4番の「親の学び支援」についてである。生涯学習推進課としては、家庭教育支援ガイドブックをホームページに掲載し、様々な場面で活用してほしいという趣旨の事業であると理解している。一方で、現在の状況を見ると、保護者自身が子育てについて様々な悩みを抱えており、学ぶことは非常に重要であると考えている。そうした中で、県として、ガイドブックの掲載だけでなく、保護者向けに直接学びの機会を提供することについて、どのように考えているか伺いたい。全県規模で保護者向けの研修会を開催することは難しい面もあると思うが、本日のようなオンライン併用など、様々な実施方法が考えられるため、保護者の学ぶ機会を多く設けてほしいと考えている。 また、県全体で実施するというよりも、各学校や子ども会、社会教育事業等における取組を推進するという意図であれば、学校等が保護者向け研修会を開催する際に活用できる助成制度や補助事業があるといいと思う。

	<p>2点目は、体験活動の促進についてである。少年自然の家が指定管理者制度へ移行したが、移行による変化について伺いたい。例えば、事業数や参加者数の増減、参加者の反応など、具体的な変化があれば教えてほしい。</p>
事務局	<p>1点目の保護者向けの学びの機会の提供については、県として、家庭教育支援ガイドブックやリーフレットの作成、研修会の開催を実施しているほか、他のアプローチ方法についても検討している。一方で、現時点では、県が直接実施する保護者向けの学びの機会の提供までは至っていない状況である。今年度、市町村に対して、どのようなニーズがあるか調査を実施する予定としており、その中で、県による保護者向け研修会の実施を希望する意見が多く寄せられた場合には、今後検討していきたいと考えている。</p> <p>研修会開催に係る金銭面での支援については、「こどもを育てる地域の連携事業費補助金」において、家庭教育分野についても補助を実施している。家庭教育支援に関する研修会を開催した場合には補助対象となっており、希望する市町村に対して補助を行っている状況である。</p> <p>2点目の自然の家が指定管理者制度へ移行したことによる変化についてである。運営面では、キャッシュレス決済が導入されたことで、支払いが大変便利になった。また、お風呂についても、以前は各自でシャンプーやリンスを持参していたが、現在は常設されたことで利用しやすくなったというアンケート結果が出ている。</p> <p>事業数については、県直営時より増加している。一方で、参加者数については十分に確保できなかったと聞いている。その要因として、周知方法が十分ではなかったことが挙げられている。今年度は、その点を踏まえ、早い段階から周知を行い、多くの方に参加してもらえよう取り組んでいると聞いている。また、実際に参加した方々からは、非常に好意的なアンケート結果が寄せられている。</p>
樋口委員	<p>保護者向けの学びの機会を提供することは、とても大事なことであると考えている。魚沼市では、教育センターが主催する、教職員向けの不登校問題やゲームとの関わり方などに関する研修会について、保護者も参加可能である旨を案内したところ、保護者からも参加していただいた事例があった。</p> <p>県で実施する場合、100人規模など多くの参加者を集めることは難しい面もあると思うが、社会教育という観点から考えれば、少人数であっても学ぼうとする保護者がいること自体が非常に重要であると考えている。</p> <p>そのため、今後、何らかの形で保護者向けの学びの機会を提供することについて、検討していただけるとありがたいと考えている。</p>
佐藤会長	<p>今の、教職員向けの研修会に保護者も参加されたという取組については、オンライン形式で実施したものか、それとも会場形式で実施したものか伺いたい。</p>
樋口委員	<p>会場参集型で実施したものである。実際に会場へ足を運ぶ保護者の方がいらっしやったということである。人数としては多くはないものの、参加された保護者は、それぞれ多様な悩みや課題を抱えていると感じている。1つのテーマで非常に多くの参加者が集まるわけではないが、少しずつでも参加してくださる方がいるということが大切であると考えている。</p>
長下部委員	<p>今、樋口委員から発言のあった内容と少し重なるが、私の地元である新発田でも、</p>

	<p>先日、所属団体の総会において同様の意見が出された。すこやかな子どもを育てる会で、「はぐくみネットワーク」にも取り上げていただいたが、その中で、健やかな子どもを育てるためには、親を育てる活動も必要ではないかという意見が、地域の方々から多く寄せられた。</p> <p>具体的には、子どもに気を使い過ぎて注意ができない、しつけが十分にできていない、スマートフォンで長時間遊んでも指導ができていない、といった状況について、「親がしっかりしていないのではないか」という意見があった。</p> <p>私自身も以前から感じていたことであるが、子どもの最終的な責任は親にあると思っている。一方で、「学校でスマートフォンの使い方を指導してほしい」といった声もあるが、学校だけに求めるのではなく、親に対する学びや支援も必要ではないかと感じている。</p>
事務局	<p>これまで、直接的に保護者を対象とした研修会という視点は持っていなかったが、先ほど樋口委員から発言のあったように、既存の研修会の間口を広げるという方法があることを伺ったため、県としても今後検討していきたいと考えている。</p>
佐藤会長	<p>それでは、議題1を終了し、ここからは議題2として、皆様からご意見をいただく時間とする。まず、意見交換テーマ1について、事務局から説明願う。</p>
事務局	<p>(意見交換テーマ1:「家庭教育支援者研修の体系及び内容、フォローアップの在り方について」説明)</p> <p>県では、家庭教育支援者の養成を目的として、基礎的知識の習得を目的とした「ベーシック研修」及び実践力の向上を目的とした「スキルアップ研修」を実施している。しかしながら、家庭を取り巻く環境は、核家族化、共働き世帯の増加、価値観の多様化、支援ニーズの複雑化などにより大きく変化しており、家庭教育支援者に求められる専門性や対応力も高度化・多様化している。このため、現行の研修体系及び研修内容が、現在の社会状況や支援現場の実態に即したものとなっているかについて、改めて検討する必要があると考えている。</p> <p>また、現在、家庭教育支援者研修の修了者については、その情報を各市町村へ提供し、地域における活用を促している。家庭教育支援を一層充実させ、地域全体で家庭を支える体制を構築していくためには、研修の実施にとどまらず、研修修了後のフォローアップの在り方についても、より体系的に検討する必要があると考えている。</p> <p>については、県として担うべき人材育成の役割や研修内容、並びに研修修了後にどのような関与を行うことが適当であるかについて、ご意見をお願いしたい。</p>
佐藤会長	<p>それでは、委員の皆様、それぞれの立場からご意見をお願いしたい。</p>
佐藤会長	<p>研修内容について、現在、どのようにニーズを把握し、内容へ反映しているのか、現状を教えてください。</p>
事務局	<p>家庭教育支援者研修の内容について、現在どのように検討しているか説明する。</p> <p>研修会終了後には、参加者に対してアンケートを実施しており、「研修内容はどうであったか」「受講内容を今後どのように活用できそうか」といった内容を確認している。さらに、12月の段階で、各研修に参加した方を対象に、「成果活用アンケート」を追加で実施している。これは、研修後に実際どのように内容を活用したかを</p>

	<p>確認するものである。昨年度は、約 75%の方から、「研修内容を活用した」との回答を得ている。また、自由記述欄において、それぞれの立場に応じた活用方法や実践内容についても具体的に記載していただいております、どのように現場で活かされたかを細かく把握している。</p> <p>県としては、研修直後のアンケート結果と、活用状況に関するアンケート結果の両方を踏まえ、さらに県内の課題や現状等も加味しながら、次年度の研修内容を検討している。</p> <p>資料にも令和 8 年度の内容を掲載しているが、ベーシック研修 3 本、スキルアップ研修 3 本を予定している。令和 7 年度の結果を踏まえ、県民や家庭教育支援に携わる方々が、より実践に活かしやすい内容となるよう検討を重ねた結果、現在の内容へ発展させているところである。</p>
小林委員	<p>私は学校に勤務しており、日頃から保護者の方々と話をする機会が多い。その中で、家庭教育支援者に求められるのは、保護者の不安に寄り添うような、思いやりを持った対話であると感じている。</p> <p>今回の研修内容については、資料から読み取れる範囲でしか分からないが、知識の習得だけでなく、支援者が保護者自身の持っている力を引き出せるような、傾聴のスキルや、温かい関係性を築くための演習なども必要ではないかと感じた。</p> <p>研修会のチラシを見る限りでは、どちらかという知識の習得が中心となっているように感じたが、実際には、傾聴のスキルを学ぶ内容や、ロールプレイなどの実践的な演習も取り入れているのか、教えていただきたい。</p>
事務局	<p>スキルアップコースでは、実際に家庭教育支援チームで活躍されている方々を講師として招いている。研修の前半では、それぞれの支援チームの活動状況や、保護者に対してどのように対応しているかといった実践事例について話をさせていただいている。その内容を踏まえ、後半では、先ほど小林委員から発言のあったような、傾聴のスキルや、支援チームとして保護者にどのように関わっていくとよいかといった実践的な内容についても取り上げている。</p> <p>また、実際の支援チームの代表者に対して受講者が質問し、代表者が回答する質疑応答の時間も設けており、具体的な支援の在り方や現場での対応について学べるような形で実施している。</p>
小林委員	<p>お話を伺う中で、研修終了後に、家庭教育支援者が孤立しないようなサポートも、今後必要になってくるのではないかと感じた。研修を受講したものの、その後、支援者が一人で抱え込んでしまったり、孤立してしまったりすることもあるのではないかと心配している。</p> <p>先ほど、県として保護者向けの学びの機会について話があったが、それと同時に、こうした研修の修了者同士がつながることのできるネットワークのようなものがあったとしてもよいのではないかと感じた。また、そのネットワークに対して県が継続的に支援やサポートを行うことができれば、支援を必要としている保護者の方々に対しても、研修で学んだ内容をより効果的に生かしていけるのではないかと思う。</p>
事務局	<p>小林委員から発言のあったように、研修後の支援が重要であると考えており、研修受講者に対する伴走支援について、令和 8 年度は特に力を入れて取り組んでいき</p>

	<p>たいと考えている。現在実施している成果活用アンケートだけでなく、そのアンケートを実施するまでの期間においても、受講者に対して適宜状況を伺いながら、しっかりと伴走支援を行っていきたいと考えている。</p> <p>また、受講者に対しては、「いつでもセンターへ質問や相談をしてほしい」ということも伝えており、継続的な支援につなげていきたいと考えている。</p> <p>なお、修了者同士のネットワーク化については、現時点で明確な回答ができず申し訳ないが、今後の課題の一つとして受け止めたい。</p>
星野委員	<p>今回、ベーシック研修を受講させていただいた。研修を受けて感じたのは、家庭教育支援を行うためには、支援そのものだけでなく、環境整備が非常に大切であるということである。</p> <p>また、受講の中で、行政とのギャップや考え方の違いを感じる場面もあった。同じ研修を、行政の課長や担当職員にも受講してもらうことで、共通理解のもと、同じ方向を向いて話ができるようになるのではないかと強く感じた。研修ではアウトリーチの大切さについて学んだが、一方で、「訪問はあまりしなくてもよい」というような回答を受けることもあり、せっかく研修を受講しても、少し寂しい気持ちになる部分もあった。</p> <p>「だんぼの部屋」は学校内に設置されており、本来は保護者支援を対象としていたが、実際には子どもたちも自然に入ってくる。その中で子どもたちと接していると、様々な話を聞くことができ、ニーズの発見や関係づくりという面でも、子どもたちから多くの力をもらっていると感じている。</p>
事務局	<p>星野委員には、お仲間の皆さんと一緒に研修を受講していただいている。研修を実施する立場としては、「だんぼの部屋」のように、仲間とともに研修を受け、地域で一緒に活動していこうという方々を、今後さらに増やしていきたいと考えている。また、皆さんには、そうした取組のロールモデルとなって、地域の家庭教育支援を引っ張っていただければと考えている。先ほど、行政とのギャップを感じるというお話があったが、具体的にはどのような場面でギャップを感じているのか、もう少し詳しく伺いたい。</p>
星野委員	<p>研修では、訪問による支援の大切さについて学んでおり、実際に訪問型の支援につなげようと一生懸命取り組んでいる。しかし一方で、行政側から「そこまで行かなくてもよい」「そこまでしなくてもよい」と言われることもあり、熱意を持って取り組もうとしている支援員が戸惑ってしまう場面もある。</p> <p>そのため、行政職員と支援員が同じ研修を受講し、支援の方向性や考え方を共有することで、共通理解のもと、一体となって取り組めるようにしていくことが大切ではないかと感じている。</p>
佐藤会長	<p>行政も含めた全体の共通理解とか、意思疎通というようなことの大切さをおっしゃってくださったと思います。</p>
樋口委員	<p>星野委員のお話は、支援者を養成するための研修会を設定している一方で、その受講者が実際に活動していくための枠組みは行政が整えることが多いため、その行政側との認識や方向性のずれを感じるという趣旨であったと思う。</p> <p>家庭教育支援を担う人材の養成を目的として研修会を実施しているのであれば、</p>

	<p>人材養成だけでなく、行政職員にも参加を呼びかけていくことで、行政と支援者が一体となり、実践につなげやすくなるのではないかと感じた。ぜひ、行政の担当職員にも「一緒に参加してほしい」という働きかけを行っていただけるとよいのではないかと思います。</p> <p>また、研修内容についてである。資料を見ると、年々工夫されていることが伝わってきた。ただ、受講される方の立場によって、求められる内容は大きく変わってくると感じている。先ほど小林委員からも話があったように、支援員として保護者と向き合う際には、カウンセラーのような役割を担う場面も多いため、カウンセリングの基礎や、令和6年度に実施されていたコーチングスキルのような、相手の話を聞いたり励ましたりするためのスキルアップの内容も必要だと思う。</p> <p>一方で、令和7年度・8年度は、「事例立案・実践」といった、講座を企画し実践していくような立場を想定した内容になっている。行政職員のような立場の方であれば、自ら企画・実践することも可能だと思うが、「これから家庭教育支援に関わっていこう」という方々のニーズに合っているかどうかは、受講者の立場によって大きく異なると思う。</p> <p>そのため、令和6年度のような、一人一人のスキルアップを重視した内容と、令和7・8年度のような立案・実践型の内容を、交互に実施するなど、受講者像を意識しながら工夫していくことも必要ではないかと感じた。</p> <p>ベーシック研修については、家庭教育施策や現状を知ってもらおうという点で非常によい内容だと思う。一方、スキルアップ研修については、今申し上げたように、どのような対象者を想定するのかによって、内容や進め方を工夫していく必要があるのではないかと感じている。</p> <p>また、研修終了後のフォローアップについてである。現在、市町村には受講者名簿を提供しているとのことだが、受講者本人に対して修了証は発行されているのか伺いたい。例えば、「今年度、このような内容を何時間受講した」ということが分かる修了証を本人に交付しておけば、その方が地域で活動する際に提示することで、「県の研修を正式に受講した方である」ということが分かり、活動や実践の場につながりやすくなるのではないかと思います。もし現時点で発行していないのであれば、そのような仕組みも検討していただけるとよいのではないかと感じている。</p> <p>さらに、魚沼市では、「だんぼの部屋」を参考に、学校内に家庭教育相談の場を設置したが、組織ではなく個人配置のため、相談員が「仲間とつながりたい」と話していた。研修の中に、参集型で様々な団体の方々と交流できる機会や、連絡協議会のような場があると、横のつながりが生まれ、フォローアップにもつながっていくのではないかと感じた。</p>
事務局	<p>修了証については、現在発行していない状況であるため、今後検討していきたいと考えている。</p>
佐藤会長	<p>ちょうど時間的にも、テーマごとの配分が半分程度になってきたため、ここからはテーマ2についての意見交換に入りたいと思う。</p> <p>それでは、この議題について、事務局から説明を願う。</p>
事務局	<p>(意見交換テーマ2「家庭教育支援チーム未設置自治体での家庭教育支援の方策に</p>

	<p>ついて」説明)</p> <p>家庭教育を地域全体で支える体制の構築が求められている中、現在、本県では、「家庭教育支援チーム」の設置・活用を一つのモデルとして推進している。</p> <p>しかしながら、家庭教育支援チームの設置数は微増にとどまっており、活用状況についても地域差が見られる状況にある。</p> <p>このような状況を踏まえ、家庭教育支援チームを設置していない自治体に対する支援の在り方や、県として講ずべき具体的な方策について、ご意見をいただきたい。</p> <p>また、家庭教育支援チームを設置していない場合であっても、既存の関係機関の連携等により、家庭教育支援が効果的に実施されている事例があれば、その取組の概要や成果、課題等についても教えていただきたい。</p>
土田陽子委員	<p>先ほど事務局から、新潟県では現在 17 チーム設置されているとのことだが、今後どの程度の設置数を目標としているのかについても伺いたい。近隣県との比較を単純に行うことが適切かどうかはあるが、例えば富山県や山形県などを見ると、市町村ごとに1チーム設置されているような状況も見られる。県として、市町村ごとに1チームを目指すなど、何らかの目標や方向性を持っているのかについて、お聞かせいただきたい。</p>
事務局	<p>家庭教育支援チームについては、個人で対応するというよりも、様々な関係者が連携しながら、保護者を支えていくことを目的としたものである。そのため、できれば各自治体にひとつは設置されることが望ましいと考えている。</p> <p>一方で、家庭教育支援チームという名称や組織がなければ支援ができないということではないとも考えている。明確に「何チームを目標とする」と申し上げることは難しい部分もあるが、各自治体において、家庭教育担当や福祉担当など、様々な関係機関が連携しながら、保護者の抱える課題をしっかりと支えていく体制が構築されていれば、必ずしも「家庭教育支援チーム」という形でなくてもよいのではないかと考えている。ただ、理想としては、それぞれの自治体において、家庭をしっかりと支える体制が整っていくことを期待している。</p>
土田陽子委員	<p>家庭教育支援チームについては、必ずしも行政が中心となって立ち上げるとは限らず、同じ志や問題意識を持った方々が、「やろう」と集まり、活動が始まっていくという形もあるのか伺いたい。</p>
事務局	<p>どちらかという、行政が中心となって立ち上げを進めるケースが多いと感じている。一方で、地域で活動している団体等が、家庭教育支援チームの取組を知り、家庭教育支援チームの要件を満たし、自治体を通じて設置の申請を行うというケースもある。そのため、行政主導で始まる場合と、地域で活動している団体等が主体となって動き出す場合の、どちらもあり得ると考えている。</p>
土田陽子委員	<p>私は燕市に住んでおり、燕市には「サークルきらら」という、先輩方が活動されている家庭教育支援チームがある。また、資料にもあったコミュニティ・スクールの取組についても、燕市では積極的に進められている状況である。私自身も小学校のコミュニティ・スクール推進委員を務めていることから、「だんぼの部屋」のように、学校の中で家庭教育をサポートできる仕組みができればよいのではないかと提案をしている。しかしながら、実際にはなかなか進んでいかないのが現状であ</p>

	<p>る。保護者のニーズも多様化しているし、支援する側についても、それぞれ専門性や得意分野が異なるため、「ではすぐに立ち上げよう」となっても、実際には立ち上げにくい部分があるのではないかと感じている。そうした現状を実感していることから、先ほど質問させていただいた。</p>
佐藤会長	<p>家庭教育支援チームの設置そのものに限らず、実際には、地域の中で何らかの効果的な実践が行われている事例もあると思う。今回の議題では、そうした実践事例についても意見交換を求めているようであるため、それぞれのご経験や地域での取組を踏まえて、ご発言をお願いしたい。</p>
樋口委員	<p>家庭教育支援者養成研修を受講した方々が、家庭教育支援チームを立ち上げ、地域の中で子育て支援を行っていくというのが、現在の家庭教育支援チームの考え方であると理解している。また、文部科学省としても、この家庭教育支援チームの推進を進めているところである。</p> <p>一方で、「家庭教育」をどのように支えていくのかという視点で考えたときに、先ほど土田委員からも話があったように、富山県や山形県では設置数が少ない状況であり、全国的に見ても、家庭教育支援チームという仕組み自体が、まだ広く浸透しているとは言い難いのではないかと感じている。そのため、家庭教育を支援する制度として、家庭教育支援チームだけに役割を求めてよいのかという疑問もある。</p> <p>例えば、子ども会の皆さんや学校関係者など、様々な立場から見たときに、困っている家庭や悩みを抱える保護者を支えるためには、どのような仕組みが必要なのか、もっと多様な相談や支援の形があってもよいのではないかと考えている。</p> <p>例えば、こども家庭庁では、各自治体に「こども家庭センター」の設置を求めている。これは妊娠・出産から子育てまでの総合相談窓口としての役割を持つものであり、主として乳幼児期の支援に重点が置かれているが、相談機能を持たせることもできる。また、教育センターでも様々な相談支援を行っているし、「だんぼの部屋」のように、学校という身近な場所に相談窓口があるという形もある。</p> <p>そのため、「家庭教育支援チーム」という形だけにこだわるのではなく、「家庭教育支援をどのように進めていくのか」という観点から、各委員の立場で、「こういう形があるとよいのではないか」という意見を出し合うことで、支援の窓口や仕組みが、より広がっていくのではないかと感じている。</p>
小林委員	<p>樋口委員のお話を伺い、私自身、子どもが小さい頃に地域の子ども会活動に参加していたことを思い出した。その際、私が学校の教員であることを地域の方々が知ると、家庭での子どもの教育に関する悩みや、「こういう時はどのように対応したらよいか」といった相談を受けることがあった。そうした経験から考えると、「家庭教育支援チーム」という形にこだわらず支援を考えていくという視点は、とても大切であると感じている。すでに地域で活動している団体にも、家庭教育を支える役割を担っていただける部分があるのではないと思う。</p> <p>そのため、既存の団体に対して、「県としては家庭教育支援をこのように考えている」ということを、もっと積極的に様々な場面で発信していくことも必要ではないかと感じた。また、既に活動している団体同士がつながっていくことで、家庭教育支援の受け皿が広がっていく可能性もあるのではないと思う。そうした取組を、</p>

	<p>県が主導して進めていくことも、一つの方向性として考えられるのではないかと感じた。</p>
事務局	<p>県としてのメッセージを、しっかり発信していくことが大切であると感じた。</p> <p>その発信方法については、ホームページでの周知も含め、どのような形が効果的か、今後検討していきたいと考えている。</p>
大橋委員	<p>私自身も、平成14年から16年頃に、燕市のメンバーと家庭教育研修会に参加していたことがあった。その後、そのメンバーで家庭教育の会を新たに立ち上げたというよりも、ステップアップ研修を受け、「もう少し学び続けたい」と考えた人たちに対して、生涯学習推進センターが場所を提供してくださり、勉強会という形で活動を続けていた。結果として、その活動は10年近く続いたと思う。最終的には、それぞれが忙しくなったこともあり、発展的に解消する形となったが、実際には、それぞれの活動状況を持ち寄って報告し合うような会を継続していたという状況であった。しかし、私はその場が非常に励みになっていた。「みんなも頑張っているのだから、自分も頑張ろう」という気持ちになり、大きな力をもらっていた。</p> <p>現在研修を受けている方々についても、研修を受けて終わりではなく、「この後も学び続けたい」「活動を続けたい」という思いを持っている方が多いのではないかとと思う。そのため、そうした方々が継続的につながり、学び続けられる環境を、生涯学習推進センターとして用意していただけると、活動の継続にもつながっていくのではないかと感じているが、いかがか。</p>
佐藤会長	<p>学び続けられるような仕組みがあることで、支援者同士のつながりや情報共有にもつながっていくという、実体験を交えたご意見であったと思う。</p> <p>そうした継続的な学びや交流の場づくりについて、実現可能性も含めて、どのように考えているか伺いたい。</p>
事務局	<p>学び続けられる環境づくりは非常に重要であると考えており、本日いただいたご意見も参考にしながら、今後、支援者同士がつながり、情報共有や学び合いができるようなネットワークづくりについて検討していきたい。</p>
星野委員	<p>大橋委員のご意見に、私も賛成である。また、事例発表をされた方々に対して、活躍できる場を提供していくことも、一つの方法ではないかと感じている。</p> <p>私自身も、以前、日帰りで佐渡へ事例発表に行かせていただいたことがあった。その際、自分たちが学んできたことを発表できる場があるということ、とても嬉しく感じた記憶がある。</p> <p>また、少し紹介させていただくと、「だんぼの部屋」のメンバーではないが、地域で活動しているボランティアの方々の中には、学校の外で支援活動を行っている方もいる。例えば、学校に立ち寄りにくい子どもたちや、共働き家庭の子どもたちなどを対象に、近くの公民館を夕方に借りて、子どもたちの居場所づくりを行っている。そこには地域の方々も自由に関われるようになっており、子どもたちが立ち寄ってから家に帰るような取組を行っている小さなボランティア団体もある。そのような活動をされている方々に対する継続的な支援も、非常に大切であると感じている。学校現場にいと、子どもたちは小学校6年間、中学校3年間と、それで終わりではなく、兄弟姉妹も含めて長く関わる家庭も多い。そのため、保護者に対す</p>

	<p>る継続的な支援が必要な家庭が増えてきていると感じている。</p> <p>保護者の方々も大切な存在であり、地域として、継続的に支え続けていくことが大切ではないかと思っている。</p>
佐藤会長	<p>身近な事例のご紹介もあり、地域の中で、できることをコツコツと続けながら活動している支援者の方々が、実際に多くいらっしゃるのだと感じた。そのような中で、行政として、そうした地道な取組をどのように把握し、認知しているのか。また、それらの活動や実践を発信したり、情報共有したりしていく仕組みが、現在どのようなになっているのかについて伺いたい。</p>
事務局	<p>「はぐくみネットワーク」の事例紹介の中で、各自治体の取組について紹介している。そうした内容をホームページに掲載することで、必要としている方々が情報を活用できるような体制づくりを進めているところである。</p>
瀧口委員	<p>私は上越市に住んでいるが、上越市内には家庭教育支援チームが複数ある。その中で、スタッフとしてではなく、参加者として活動に参加したことがある。行政が行う支援があれば、地域に根差した形で活動している支援チームもあり、保護者や家庭にとっては、様々な選択肢があることで、自分に合った場を選ぶことができるのではないかと感じている。</p> <p>私が参加していたのは「親子劇場」であったが、自分の子どもだけでなく、様々な子どもたちとのつながりができたり、保護者同士のつながりができたりしていた。特に「支援してほしい」という明確な思いがなくても、参加することで、自然と学びや交流の場になっていたのだと、今振り返ると感じている。</p> <p>一方で、「今、この課題を解決したい」「誰かに助けてほしい」というような、具体的な支援を必要とする場合もあると思う。そのため、県としては、支援を必要とする方のニーズに合った形を考えていくことが大切ではないかと思う。そういう意味では、行政としても、様々なパターンの窓口や居場所がたくさんあることで、支援を受ける側にとって、「選べる」ということにつながるのではないかと感じている。また、行政が行っている取組だけでなく、地域に根差した活動についても、まだ十分に知られていないものがあるのではないかと思うので、そうした活動を掘り起こしていただきたいと感じている。さらに、現在行われている取組について、広く発信や周知を行っていただければ、地域の方々にもより届いていくのではないかと思う。</p>
佐藤会長	<p>瀧口委員からは、支援の選択肢を広げるという意味でも、行政による支援だけでなく、地域に根差した支援についても、「掘り起こし」が必要ではないかというご意見をいただいた。ぜひ、そうした地域の取組を把握し、掘り起こしていくための何らかの方策についても、ご検討いただければと思う。</p> <p>それでは、引き続きご意見があればお願いしたい。</p> <p>また、テーマ2に限らず、先ほどのテーマ1も含め、「これだけは発言しておきたい」ということがあれば、あわせてお願いしたい。</p>
長下部委員	<p>情報発信についてである。現在、教育委員会では、「かけはし」という広報誌が、小・中学校を通じてメール配信されている。家庭教育支援ガイドブックや、生涯学習推進課からの各種案内についても、同様に学校を通じて、保護者へメール配信し</p>

	<p>ていただけるとよいのではないかと感じている。</p> <p>ただ、家庭教育支援ガイドブックは内容量が多いため、一度に全てを送るのではなく、例えば長期休業前に、「睡眠」や「規則正しい生活リズム」といったテーマごとにピックアップして発信していくといいと思う。</p>
佐藤会長	<p>具体的なアイデアとして、様々なルートや媒体を活用しながら、その時期ごとのポイントを絞って、継続的に情報発信していくことは、保護者にとって「支えられている」と感じられる取組にもつながるのではないかと思います。</p> <p>本日、多くの貴重なご意見をいただいたので、事務局においては、それらを参考にしながら、来年度の事業へ反映していただければと思う。</p> <p>それでは、ここで進行を事務局へお返りする。</p>
事務局	<p>長時間にわたり協議いただきありがとうございました。本日協議していただいた内容を踏まえ、来年度以降の取組の参考とさせていただきたい。</p>